希望とは何か――。この抽象的な問いを社会科学から探求する「希望学プロジェクト」が、東京大学社会科学研究所で始動した。二年目を迎えた同プロジェクトの責任者、玄田有史助教授に聞く。

――希望学プロジェクトを始めようと思われたきっかけは。

玄田　これまで若年の雇用問題を考える機会が多かったのですが、ニートやフリーターについて、よく、働く意欲とか能力が欠けているのではないかといわれてきました。そういう面がまったくないとは言いませんが、むしろ意欲や能力は十分にあるのに、社会に出ることに一歩踏み出せないなにかがある。それはもしかしたら、働くことに対して希望が持てないんじゃないかなと感じていました。

国際比較の調査でも、日本の若者が他国の若者に比べて「将来に対して希望が持てない」という結果が出ているそうです。以前には、村上龍さんの小説『希望の国のエクソダス』や、東京学芸大学の山田昌弘さんが書かれた『希望格差社会』なども大きな話題になった。もしかしたら、希望が時代の一つのキーワードではないか、と。

実際、タイトルに「希望」という言葉を含む本の数を調べても、

編集長インタビュー

Interview by Shoyo Yutani
Photo by Kazutoshi Sumitomo

東京大学
社会科学研究所助教授

Number 555

インタビュアー・本誌編集長　湯谷昇羊　写真・住友一俊

玄田有史

Yuji Genda

希望学プロジェクトが明かす
挫折と失望からの修正プロセス
ウィークタイズという緩やかなかかわりが希望を育てる

一九九八年と二〇〇二年に急速に増えている。社会科学が、希望について真剣に研究してみる時期ではないかと考えました。

――若者の無気力や無関心は前からいわれていますが、二〇〇〇年前後から希望というキーワードが増えたのはなぜでしょう。

玄田　私自身、明確な答えが見つかっているわけではないですが、八〇年代から九〇年代にかけて「自分探し」が盛んに語られるようになったことも背景にはあるのかもしれません。「自分らしさ」が大切とされ「やりたいことを見つけよう」と言われる。

希望を持って将来を考えていかなきゃいけないというプレッシャーは、われわれの世代よりも、今の若い世代のほうがずっと強くなっているかもしれません。

昔は、そういう意味ではラクだった。希望といえば「今は中古車に乗っているけど新車に乗りたい」とか「貸家じゃなくて自分の家を持ちたい」とか、将来に向けて非常にわかりやすい希望を、誰もが共通して持っていた。今もそういう希望がないとは言いませんけど、将来という向こう岸になにか自分の希望が待っているという感覚は、なかなか持ちにくいんじゃないでしょうか。

げんだ・ゆうじ／1964年島根県生まれ。88年東京大学経済学部卒業。92年同大大学院経済学研究科博士課程退学。ハーバード大学、オックスフォード大学各客員研究員、学習院大学経済学部教授などを経て、2002年より現職。経済学博士。専攻は労働経済学。主な著書に『仕事のなかの曖昧な不安』（中央公論新社）、『ジョブ・クリエイション』（日本経済新聞社）、『ニート』（共著、幻冬舎）、『働く過剰』（NTT出版）、『希望学』（中央公論新社）など。

人間の関係が強い絆から弱い絆へ変化

――希望が持てない若者の問題は九〇年代後半からの就職氷河期と密接に関連しているのでは？

玄田　九八年と〇二年というのは非常に象徴的で、希望退職が集中的に増えた年でもあります。就職難という若者の問題だけではなくて、月並みな言い方ですが、子どもというのはおとなの鏡で、おとな自身の不安や不満、将来に対する閉塞感が、非常にストレートなかたちで子どもや若者に表れているのではないかと感じます。

――戦後の復興期から高度成長期は、希望を持てばかなえられた時代です。バブル崩壊後の〝失われた一五年〟に、なにか若者に変化があったのでしょうか？

玄田　人と人とのかかわり方が変わった気がします。おそらく、日本はこの一〇年間でぐーっと変わってきたと思う。

昔は、会社で飲むのも家や社宅に帰るのも遊ぶのもみんな一緒。一致団結した人間関係のなかに自分をうまく位置づけることが、社会で成功する一つの大きな指標で

した。人と人とのつながりが、そうした強い絆から弱い絆（ウィークタイズ）に変わってきている。むしろ、ビジネスチャンスを得たり、転職や独立するためには弱い絆のほうが重要で、たまにしか会わないけれども信頼でつながっている人間との緩やかな絆を持っていて、そこから「ああ、こんな世界もあるのか」というヒントを得られる人が成功している。

ですから、希望について調べていても、他者とのかかわりが非常に大きな役割を持っているという結果も出てきます。希望が失われたときにショックでニート状態になることもあれば、それをバネに飛躍していくこともある。人と人、人と社会との関係を再度問い直すきっかけが、希望という概念ではないかと思っているんです。

――自殺者が年間三万人を超える状態が何年も続いているのも、希望が持てないことが理由ですか？

玄田　死に対しては軽々しいことは言えませんし、死ぬこと自体が希望であってほしくないとは思いますけど、きっといろいろな意味でかかわっているんでしょうね。

希望学は、決して若者のためだけの学問ではありません。希望というものは失望や絶望と表裏一体で、死や別れの問題とも密接にかかわっています。高齢社会という意味で考えれば、将来の終着点が見えているなかで、なぜ生きていくのかという問題もあります。希望学は、必ずしも将来バラ色の未来が約束されていない人たちのためにどうするかも大きなテーマですから。

今、岩手県の釜石市にプロジェクトの調査でお邪魔しています。いっときは「地方の希望の星」ともいわれた都市ですが、過去のように、シャッターを開ければお客さんが列をなして待っているというような希望は戻ってこない。それが今は、いろいろな仕掛けもなされていて、新しい希望も生まれつつある。むしろ、緩やかな衰退を経ながら、そのなかで希望を持って生きるというのはどんなことか、教えられます。

――これまでの研究で、どんなことがわかってきたのですか。

玄田　今、インターネットの予備調査を終えて、全国規模の標本調査を分析していますが、びっくりするほど似た結論が出ています。

やりがいのある仕事に就いた経験がある人を調べてみると、「かつて希望を持っていた」という人が多い。ただ、自分の希望がかなっているからやりがいがあるというわけではない。中学三年のときに希望した職業に実際に就いた経験のある人は、十数パーセントにすぎません。

希望なんて、ほとんどの人が失望に変わる
そこで希望を修正していけば、なんとかなる

希望を左右する親の期待

そのなかで、いちばんやりがいのある仕事に出合う確率が高いのは、かつてある希望を持っていたのが、途中で希望を柔軟に修正してきた人たちです。たとえば、野球選手になりたかったのに、自分には無理だったとしますよね。

――それが途中で変わっていく。

玄田　野球選手になるという希望の原点には野球が大好きだという思いがあって、それは初めて甲子園に行ったときに、あの芝生を見て感激したことかもしれない。だから、野球選手は無理だとわかったときに強いショックは受けながらも、なら自分は日本一の芝生職人になって、子どもたちが喜んで野球ができる仕事をしたいと変えていく。希望が失望に変わったときに、それを修正するプロセスを経ることによって、自分の本当の可能性や、やるべき将来が見えてくる。それが、現在のやりがいにもつながっている。

私は、別に希望なんかなくても大丈夫という気持ちもある。でも、なんらかの意味で希望が必要だとすれば、それはかなえるために必要なのではないのかもしれません。むしろ、失望して初めてわかる本当の意味でやりたいこと、やるべきことがある。でも、希望がなければ失望もできないんです。

別の調査結果では、希望を持っていた人には友だちが多かったり、家族から期待された記憶を持っているといった傾向もあり、共通点は他者とのかかわり合いです。

孤独な失望は危険だと思います。なにかを失ったときに、さっきの例でいえば「どうして君はそんなに野球好きだったの？」という他人からの問いかけがあって初めて考えるわけです。思いがけない他人とのかかわりを持つことによって、自分を修正できる。これを、全部自分自身の力で歯を食いしばって乗り越えていけ、というのはたぶん違うと思うんです。

――ニートも、引きこもりがちになって外部からの接触がなくなっていけば、希望が持ちにくくなる。両親や身近な人の働きかけで希望が持てるようになるものですか。

玄田　持てるようになるかどうかはわかりませんが、人とのかかわりを持たないで生きていくと、知らず知らずのうちに自分はどんどん弱くなっていく、衰退していくと、精神科医の方から聞いたこともあります。かかわりを失うことによって、希望のシードをどんどん無意識のうちに枯れさせていくということはあるのでしょう。

――周囲からの期待がある子どもは希望を持ちやすいということですが、親の期待につぶされてしまう場合も多いのでは？

玄田　ニートの問題でも、親があまりにもかかわり過ぎるケースと、親が親であることを降りてしまっているケースと両極端あります。そのうち特に深刻なのは、親が親であることを降りてしまっているケースです。親が過剰にかかわっている場合は、引き離せばうまくいく可能性がある。親が子どもに期待することから逃げてしまうのは、期待し過ぎるよりも、本人にとってずっとシンドイことです。

たぶん、過剰でも過少でもないほどほどの距離感と信頼に基づく期待が、希望を持たせるのではないかと感じています。親にせよ上司にせよ、ほどほどに期待をし「希望なんて、ほとんどの人が失望に変わるんだけど、別にいいんだよ。そこで希望を修正していけば、なんとかなる」って言えるかどうかではないでしょうか。

――今後の研究予定は？

玄田　今年度は先の釜石市調査がメインになりますが、併せて引き続きアンケートやインタビュー調査を丹念にしていく予定です。

また、米国の研究者から「希望の欠如は日本だけの問題ではない」と指摘されたこともあり、オーストラリアなども含めた希望に関する国際比較調査も企画中です。日本という枠組みを超えて、国際比較のなかで希望を考えていくことが重要だと思っています。

どうすれば希望が見つかるという答えはないが、二〇年後、三〇年後の人が、今の日本の状況を知りたいというときに、僕らはなにを語れるのだろうか。希望というじつにあやふやなものだけれど、この時代の雰囲気を象徴しているものが、どう語られたかをきちんと記録していくことが、われわれの仕事だと考えています。

D

Comment

手き聞独白

玄田さんが福島県の水産会社に行ったときの話。商品担当に抜てきされた女性担当者が、「全然できなくて辞めたい」と言ったら、40代の先輩から「ちゃんと今のうちに失敗しておけばいいんだよ」と言われてすっと変われたという。タイミングよく期待する言葉はとても大事だという。企業社会においても、人材育成に余裕がないのは、おカネに余裕がないのではなくて、先輩や上司が1人ひとりに期待をかける余裕がないのでは、という指摘はドキリとさせられる。